

小学校におけるチェンバロを用いた鑑賞教育研究

和歌山市立藤戸台小学校：新江涼加

和歌山大学教育学部：山名敏之

【研究の趣旨】

バロックおよび古典派のレパートリーは、小学校音楽科鑑賞教育において主要な位置を占めている。これはポピュラー音楽をも含めていわゆる今日の西洋音楽の基礎がこの18世紀に確立されたことと深く関係している。つまり「音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わう」ためには特にバロックおよび古典派のレパートリーへの理解が基礎となる。今日その鑑賞教育におけるピリオド楽器による演奏の採用が目立って来た。「音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて、鑑賞する」ためには当然のことと考えられる。

バロックおよび古典派初期の鍵盤楽器といえば今日のようなピアノではなく、チェンバロであったことは周知の事実である。本連携では、強弱の変化をつけることの不可能な発音構造を持つ楽器であるチェンバロの全盛期に、「音楽を形づくっている要素」の中でももっとも基本的な要素といえる拍子が高度に発達したという逆説的な歴史的背景を踏まえ、①拍のながれを表現する為には強弱法によるのではなく長短法を主体とすべきであること、②長短法は音色、リズム、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている諸要素の感受および表現に大きく関わっていることという2点について、大学に設置されているチェンバロを運び込むことによって実践的に鑑賞教育を行う方法について共同研究する。

1. 題材名

耳で知る歴史と地理 ～チェンバロを聴こう～

2. 題材の目標

- ・チェンバロの発音原理と音の強弱がつかないという特性について理解する。
- ・チェンバロを実際に触ることによって現代のピアノとの相違を体感する。
- ・ドイツの楽曲とフランスの楽曲を聴き、それぞれの国民の気質に基づく特徴を捉え、楽しむ。

3. 題材について

陸続きで隣同士の国でありながら、その国民性が全くと言って良いほど異なっているドイツとフランスの音楽をチェンバロという楽器の演奏を通して知る。

4. 対象

藤戸台小学校5年生児童

【表】藤戸台小学校との連携事業の取り組み経過

	取り組みの内容	日時	場所
1	新江先生とチェンバロを教材とする鑑賞授業の実施に関する協議を行う。演奏会の日程は11月28日（木）とし、多くの児童が登校してくる7時半より前に搬入作業を行い、3時限、4時限の2時間を使い、5クラスを2グループに分け、2回公演を行うこととなった。	メール等による意見交換	
2	<p>●ピアノとチェンバロの発音原理の相違について、チェンバロにおける弦を撥く素材を解説し、現代のピアノとの音色の比較をする楽曲として○1. ペツォールト作曲メヌエットと採り上げた。</p> <p>●国民性、音楽的な気質の相違を知るドイツの作品として○2. J.S.バッハ作曲 フランス組曲第5番よりアルマンド、クーラント、サラバンド、またフランスの作品として○3.ジャン＝アンリ・ダングルベール 組曲第1番よりプレリュード、アルマンド、クーラントを採り上げた。</p> <p>※特に18世紀前半においては、ドイツが音楽史的にはフランスより後進国であり、フランスの音楽を移入し自国のものとすることを模索していた時代であったことを踏まえ、J.S.バッハがフランス風のスタイルによって作曲したフランス組曲を題材として選んだ。</p> <p>●最後にチェンバロの特性を十全に披露するために、○4. J. S. バッハ作曲イギリス組曲第6番よりプレリュードを採り上げた。</p>	メール等による意見交換	
3	新江先生担任クラスの児童による、道徳の授業を参観させてもらった。また、昨年までとは違い、2階の音楽室にて演奏会を行うこととなり、エレベーターを使って2階までチェンバロを運ぶ算段を整えた。	11/27	藤戸台小学校
4	耳で知る歴史、チェンバロを聴こう！の授業実施。2回開講	11/28	藤戸台小学校音楽室

【取り組みの成果（アンケート調査をもとに）】

ワークシートの最後には、「一番心に残った曲はなにか？演奏を聴いて思ったことを書こう。」と問いかけた。

○バッハ作曲「イギリス組曲第6番よりプレリュード」が多くの児童にとって大変印象的だったようである。「迫力があつた」、「リズムがかっこいい」、「感情の変化がすごかった」、「強弱があつた」、「といった感想とともに、曲の構成により深く言及した「明るく楽しい部分と悲しい部分とがあつて面白い曲だった」、「リズムが変化していくのがおもしろかった」「ゆっくりなところと速いところがあつた」といった曲の構成についての感想も散見された。

○上記バッハ派が多数を占める一方で、ピアノの音色との比較から既知の作品であるペツォールト作曲のメヌエットを選んでいる児童も少数いた。特に自分も演奏したことがあると回答した児童が多く、自分がピアノで演奏した場合との比較から、全く曲の印象が異なっていることに大きな驚きを感じているようであった。

○ジャン＝アンリ・ダングルベール 組曲第1番よりプレリュード、アルマンド、クーラントをお

気に入りに選んでいた児童が少なからず存在した。本作品は、バロック期フランス音楽の中でも特に洗練され、知的にかなり高度に作られている作品である。バッハのイギリス組曲のような、ヴィルトオーズの要素は全く無く、場合によっては退屈と感じさせてしまうことも懸念していたが、この音楽の特性を直感的に捉えることのできる児童がいたことは驚きであった。「おもわず歌い出しなくなるほど楽しい」「おとがきれい」といった感想からも、作品の本質の一端をしっかりと捉えていることが分かる。この試みは今後も続けていくべきであろう。

○チェンバロの音ピアノと比較して、一音一音がクリアであるという特徴を指摘している感想があった。

○チェンバロの音を弦楽器にたとえる感想が少なからず見受けられた。授業内ではこの点に触れていなかったことから、優れた感性であると考えられる。

○「強弱がついていて云々」の感想が複数見られた。この場合、授業内ではチェンバロの特性として強弱のつかない楽器であること、そのため音の長短のさじ加減で演奏表現をすることを説明していたことから、それでも「強弱がつく」と判断していると考えられ、興味深い。音の長短のさじ加減は人の耳には強弱として捉えられるという、音楽の本質をつく感想といえる。

○ピアノと比較して鍵盤が軽く驚いたといった感想も見られた。

【総括】

○授業終了までの感想を記述する時間が短かったにもかかわらず、詳しい感想が沢山あった。

○チェンバロの音について「音が高かった」という感想が多く見受けられた。2回の授業の双方の感想に見られたため、語彙の問題だけではなく、児童にとって特別に共通して感じられる特性があることが考えられる。理論的には音の高さは同じなので、倍音の構成念頭に授業ないでこの点を捉えた展開も今後の企画として考えられる。

○ペツォールト作曲のメヌエットに言及する児童が多かったことから、次回はチェンバロの発音原理や材質についてのクイズをするのではなく、この楽曲によるピアノの演奏とチェンバロの演奏法の相違について、徹底検証する時間帯を設けるのも良いと考えられる。この授業の担当の先生が来年度の学年を受け持つことになるのかにもよるが、特にチェンバロ演奏会が2回目の学年などには有効であると考えられる。

○曲の構成について図式化していた児童がいた。時間軸に沿って直感的に大楽節を分けたと考えられる。こういった構成を気にしながら聴いていた児童がいたことから、あらかじめ曲の構成を図式化して提示し、演奏箇所についても手伝いの学生に指示させながら演奏を聴かせる授業も考えられる。

